

## 海と大地の豊かな恵み 水産都市の文化を発信

宮城県気仙沼市は親潮と黒潮がぶつかり合う豊かな海と、複雑に入り組んだリアス式海岸という陸地の両方から恵みを受けた、日本屈指の水産都市です。気仙沼湾という四季を通して穏やかな天然の良港を持ち、カツオやサンマ、サメ(フカヒレ)、カキなど、さまざまな海産物の宝庫となっています。日本食全体において大きな役割を占める魚の重要性や、世界でも注目されている魚食の健康増進効果などを踏まえて、気仙沼市は1986年に「魚食健康都市宣言」を行い、漁港としての特色を生かした取り組みを進めてきました。

そんな気仙沼市の歴史を振り返ってみると、海と山、両方の豊かさに恵まれたこの土地で、私たちは独自の生活様式や食文化を育んできたことが分かります。地元で長年にわたって息づいてきた食文化を次世代に伝え、町の魅力や個性としていくために行ったのが、2003年の「気仙沼スローフード」都市宣言です。

さらには、スローフードへの取り組みの延長として、2004年6月にイタリア・ジェノバで開催された第1回スローフィッシュ・フェスティバルに参加したことを契機に、チッタスロー(スローシティ)の認証取得に向けた活動を始めました。チッタスロー協会は1999年にイタリアで発足した国際組織で、地方中小都市の生活や文化、歴史を再

# Voice

## 海と生きる 気仙沼市復興のまちづくり

気仙沼市役所 震災復興・企画課  
主幹兼政策・調整係長

菅野拓哉

海と生きる  
Stay with the Ocean  
Kesennuma, JAPAN

気仙沼は海と共に生きてきた。復興計画には、その思いが詰まっている



出港を控えて気仙沼港に停泊する漁船。海と陸との恵みが、気仙沼を支えてきた



冷え込みの厳しい朝、気仙沼湾に立ち上る“けあらし”。海から立ち上る水蒸気が、陸から降りてくる冷たい大気に触れると生まれる幻想的な光景だ

評価し、スローな生活と環境を尊重して、「住み良い都市」という新たな都市の在り方を提唱・普及することを目指しています。今年6月の時点で、加入しているのはイタリア国内だけでなく、ドイツ、ポーランド、フランス、イギリス、韓国、中国など、世界30カ国、225都市に上ります。しかし、5万人未満という従来のチッタスローの定義を超える約6万6000の人口を抱えることや、環境

保護対策が不十分ことなどから、気仙沼市は正式な加入手続きを見送ってきました。潮目が変わったのは、東日本大震災がきっかけです。

### 復興に向け共生を誓う 地方発、世界の港町へ

2011年3月11日。震度6弱の地震が気仙沼市を襲い、津波とコンビナート火災がそれに続きました。

1434人の方が死亡もしくは行方不明になり、2万6000棟近くの家屋、約9500世帯が被災しました。地盤沈下は海岸地域にも及び、5年半以上たった今も復興は道半ばです。海が秘める人知を超えた力の傷跡は、今も気仙沼に残されています。

けれども、気仙沼市は復興の中心に「海」を据えま文化の中心には、常に海があったからです。11年9月、市の震災復興計画を策定するに当たり、気仙沼市震災復興市民委員会は市の在住者・出身者を対象に、復興計画の副題を募集し

ました。その中から選ばれたのが「海と生きる」という言葉です。

先人たちは、長い歴史の中で幾度となく津波に襲われながら、海の可能性を信じ、積極的に関わり合って暮らしてきました。それは単に「海で生活していた」というだけではありません。私たち自身も自然の一部だという認識を持ち、自然と対等の関係を築いて、「海と」共に生活していたということができるといえます。気仙沼の人たちの生き方、考え方は、海から生まれてきたともいえます。今を生きる世代が再び海の可能性を信じて復興を成し遂げることこそが、犠牲者への供養となり、次世代への希望となる——私たちはそう考え、これからも「海と生きる」ことを選びました。

こうした町の歴史と文化を尊重する姿勢が評価されたことに加え、協会側から復興支援としての加入条件緩和の打診を受けて、2013年、気仙沼市は日本で初めてチッタスロー協会に正式加盟することとなりました。

気仙沼市が目指す未来の姿は、「地方にある世界の港町」です。「自然と共生した生活」「都会の真似はしない」「産業は国際的に」「三つの目標を軸に、インフラの復興と共同体やそれを担う人たちの育成に力を入れてい

ます。中でもインフラについては、ただ整備するだけではなく、防災の面でも機能するまちづくりが必要で

す。気仙沼市はチッタスローの考え方を生かし、景観や環境に配慮したまちづくりにも力を入れています。

また、震災において、自治体や地域コミュニティの強い結束は、避難所運営などを支える大きな力となりました。これから先、人口減少は避けられないかもしれませんが、「みんなが担い手」「プロセス重視」「市民の力の結集」「市外の力の参加」という姿勢によって、魅力ある町を目指します。

気仙沼市の中心部に位置する内湾地区では、2018年春ごろにチッタスローやスローフードの考え方を具現化する「スロー村(仮称)」が誕生する予定です。一人でも多くの方に、復興への道をたどる気仙沼市に足を運び、食、自然、街、人などのさまざまな魅力を体感していただきたいと思っています。

### Profile

かんの・たぐや  
大好きなふるさとに少しでも貢献したいとの思いから、1997年に気仙沼市役所に入庁。2010年4月に現課(旧名・企画政策課)に配属。現在はふるさと納税、スローシティ、地域振興計画などを担当している。震災後は復興計画策定・進捗管理に従事した。



津波で大きな被害を受けた内湾地区にはスロー村(仮)が作られ、気仙沼の歴史と文化を発信する拠点になる予定だ